



2025年度大学主催秋季人権問題講演会

「絵本とインクルージョン： 障害の社会モデルの観点から」

(絵本作家、関西学院大学非常勤講師)

三 島 亜 紀 子

はじめに

ただいまご紹介いただきました三島と申します。実は、絵本作家としてお話しするのは今日が初めてで、少し緊張しています。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私自身、子どものころから絵本や児童書が好きでした。母はよく、私たち姉妹に読み聞かせをしてくれました。なかでも『ぐりとぐら』が大好きで、何度も何度も読んでもらった記憶があります。

最近、少子化が進んでいるにもかかわらず、絵本市場は比較的堅調だとも言われています。実際、絵本コーナーを広げている書店も増えているようです。世の中には本当に素敵な絵本がたくさんありますが、今日はその中でも、社会問題や社会正義、そして障害をテーマにした絵本に絞ってお話したいと思っています。

たとえば、イギリスの Amazon のサイトを見てみますと、子どもの本の分類に「Growing Up & Facts of Life (成長と人生の現実)」という項目があります。そこには Health や LGBTQ+ といったカテゴリーが並び、Difficult Discussions には、虐待やドラッグの乱用、貧困、暴力といった下位分類が設けられています。つまり英語圏では、絵本はこうした社会問題を知り、考えるきっかけ

になるものとして位置づけられていると言えます。

一方、日本の Amazon を見てみると、同様の分類は見当たりません。これが少子化の影響によるものかどうかは、正直なところ、はっきりとは分かりません。ただ今後、絵本や児童書が「夢を与えるもの」「楽しいもの」にとどまらず、社会の問題を知り、考えるためのツールでもあるという認識が、もう少し広がっていく余地があると感じています。

ここでは、絵本を「社会を変える力をもつグラフィック・ナラティブ」として位置づけたいと考えています。また、グラフィック・メディスンやナラティブ・アプローチ、アートベース・リサーチからの影響を受けていますが、今日は時間が限られていますので、これらの議論と接続しているということだけお伝えしておきます。

本日は、I 部「リサーチ・モード」とII部「創作モード」に分けて、お話しさせていただきます。

I リサーチ・モード

自己紹介

まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。私は高校生のころ、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』が大好きでした。それと同

時に、塚崎幹夫さんというフランス文学研究者の『星の王子さまの世界：読み方くらべへの招待』（1982）を、夢中になって読んだ記憶があります。物語に登場する三本のバオバブの木が、当時の世界情勢を象徴しているとする読み解きに触れ、物語と研究をセットで楽しむ面白さを知りました。

こうした経験から、次第に児童文学作家を志すようになりました。ただ、夢を実現するには学びと旅の両方が必要だと感じ、大学に進学しました。芸術系も考えたのですが、まっすぐ線を引く練習をしなければならないと知り、あきらめました。大学進学後は、長期休暇ごとにバックパックを担いで旅をしました。その中で、貧困や福祉に関心をもつようになり、大学院では福祉を専門に学ぶことになりました。

最初は子ども向けの文学と漠然と考えていましたが、後に視覚優位の脳をしていることを自覚したこと、妹が芸大の絵本コースを卒業したこともあり、絵本を書くようになりました。

最初に出した絵本『妖怪バリエーをやっつけろ！』（2010）は、特定非営利活動法人「自立生活夢宙センター」の平下泰幸さんと耕三さんのご兄弟をモデルにした物語です。イラストは妹のみしまえつこが担当しました。同センターの劇団「夢屋」によって劇化され、「バリアフリー演劇祭」（全国手をつなぐ育成会連合会・日本芸術文化振興会・文化庁主催）などで上演されています。また、2025年度文部科学省「子供の読書キャンペーン」の「あなたと読みたい1冊」にも選出されました。芥川賞作家や直木賞作家の作品と並んで1冊だけ絵本が紹介されていて、驚くと同時に、平下さんご兄弟とともに喜びました。

ほかにも『ちりましほのイタクラマツ（こ



とばのたましい』(2025)ⁱ や、故・牧口一二さんとの共作『いっちゃん よくこける』(2026)などの絵本があります。後者は、インクルーシブ教育を進めることを意図した作品です。

以上で自己紹介は終わりますが、実は私、読み聞かせが苦手です。赤ちゃん絵本であれば大丈夫なのですが、すぐに噛んでしまいます。息子からは、読み聞かせをしてもらった記憶がないと言われるほどです。私には脳波に特異な所見があり、時々、分かりにくい話し方をしてしまうことがあります。今日も聞き取りにくい部分があるかもしれません。もし聞き取りづらい点や分かりにくい点がありましたら、遠慮なく「もう一度言ってください」とお声がけいただければと思います。

1 絵本と福祉

まず、絵本と福祉はつながりが強いというお話をしたいと思います。

これはよく福祉の教科書に出てくる「トインビー・ホール」というセツルメントの写真です。セツルメントとは、知識人や学生が貧しい人々の住む地域に移り住み、支援を行う拠点となった施設です。トインビー・ホールは、ロンドンの東部に位置する「イースト・エンド」に1884年に建てられました。今はおしゃれで活気のある場所になっていますが、

当時はスラム街でした。日本でも戦後、隣保館が各地に建てられていきますが、その考え方の背景には、トインビー・ホールに代表されるセツルメント運動の流れを見ることができます。

1889年には、トインビー・ホールに影響を受けたジェーン・アダムズが、アメリカ・シカゴで「ハルハウス」というセツルメントを設立しました。残念ながらハルハウスそのものは、財政的な理由から2012年に閉鎖されていますが、現在もジェーン・アダムズにゆかりのある団体は数多く活動を続けています。その一つであるジェーン・アダムズ平和協会は、児童文学賞を主宰しています。絵本や児童文学といった文化資産を通して福祉的な価値を社会に根づかせようとする活動に力が注がれていることが分かります。例年、人種問題など社会問題をテーマにした本が受賞しているようです。

日本にも、セツルメントと深い関わりを持つ作家がいます。「だるまちゃんとはてんぐちゃん」シリーズで知られる、加古里子（かこさとし）です。かこさとしは、大学時代に演劇研究会に所属し、そこで児童劇と出会ったそうです。ちなみに、アメリカのハルハウスでも、演劇活動が行われていました。

かこさとしはその後、仕事をしながら川崎のセツルメントで、子ども向けの人形劇や紙芝居といった活動に携わっておられたそうです。自作の紙芝居を作って子どもたちに読み聞かせ、その反応を見ながら改良を重ねていったといいます。そうした経験が、その後の絵本制作につながっていった、と語られています。

みなさんは、『マッチ売りの少女』をよくご存じだと思います。絵本も繰り返し、さまざまなアーティストの手によって出版されて

きました。あらためて考えてみますと、この物語には、絶対的貧困が描かれています。大晦日に凍死してしまうという悲劇を扱いながら、私たちは長らく、この物語を「感動的」「幻想的」「心美しい」ものとして消費してきました。

ハンス・クリスチャン・アンデルセンの母親は、幼いころ、非常に貧しい暮らしを経験していたと言われています。アンデルセンは、母親からそうした当時の体験を聞き、それを着想の一つとして『マッチ売りの少女』を書いたとも言われています。この作品が出版されたのは1848年です。近代化や産業化、都市化が一気に進み、社会のあり方が大きく変化していった激動の時代でした。

そうした変化のなかで、『マッチ売りの少女』のように、弱い立場に置かれた人びとの姿を描き、血縁や地縁関係にない他者への共感を呼び起こす物語が、多くの読者に受け入れられていきます。このような「弱者＝他者」への共感が少しずつ共有されていくことが、社会保障の仕組みが生まれていくための基礎になってきたとも考えられます。

先ほど、日本の Amazon の児童書には社会問題を扱う分類項目がないという話をしましたが、日本では平和や反戦、環境問題に関する良い本がたくさん出版されています。

このスライドで紹介している絵本は、時代を越えて読まれてきた作品ですので、ご存じの方も多いかと思います。思い出話になりますが、小学校低学年の頃、『かわいそうなぞう』（1970）を読んで、本当に泣きそうになった記憶があります。丸木俊の『ひろしまのピカ』（1980）を読んだ時にも言葉を失うような思いをしました。あまんきみこの『ちいちゃんのかげおくり』（1982）は、今も小学校の教科書に載っていると思います。

2019年に出版された谷川俊太郎とNoritakeによる『へいわとせんそう』は、従来の戦争絵本にはあまり見られなかった雰囲気のある絵柄で、広く読まれている作品です。『みなまた海のこえ』（1982）は、『苦海浄土』で知られる石牟礼道子が文章を、〈原爆の図〉の丸木俊が絵を手がけた、水俣病をテーマにした絵本です。

これらの絵本を手にしると、制作者の強い想いを感じることができます。そうした絵本を読んだり読み聞かせたりすることで、出来事を単に「過去のこと」として葬り去るのではなく、いまの私たちの生活とつながっていることを経験する／させる装置として機能しているのだと思います。

『阿賀のお地藏さん』（2006）という絵本は、社会活動の一つの方法として位置づけることのできる作品ですので、ここでご紹介したいと思います。作者のWAKKUNは神戸を拠点とするイラストレーターで、阪神・淡路大震災の際には、被災地支援や復興のために「ガッツやKOBE」のTシャツをデザインしました。そのWAKKUNが、新潟水俣病の経験を子どもたちに語り継ぐために制作したのが、この絵本です。

私は最近、『春、阿賀の岸辺にて』（監督：小森はるか）という映画を観ました。この映画では、新潟水俣病の被害者支援に半世紀にわたって関わってきた旗野秀人さんが、現在も小学校で『阿賀のお地藏さん』の読み聞かせ活動を続けている姿が描かれています。絵本は、出来上がった時点で完結するものではなく、語り継がれるなかで生き続けていくのだと実感しました。

同映画の出演者欄には、旗野さんと並んで小林知華子さんの名前があります。小林さんは、運動を支える若い世代の一人です。私事

になりますが、彼女は私が会津大学短期大学部で教えていたころの学生でして、私は一人として誇りに思っています。

2 障害の「医学モデル」と「社会モデル」

日本の絵本の福祉分野で、今も代表的な存在としてあげられるのが、『さっちゃんのみほうのて』という絵本です。この作品は、先天性四肢障害児父母の会の方たちと、絵本作家のたばたせいいちが共同で制作したものです。1985年に偕成社より出版され、障害者をテーマとした絵本としては異例の売れ行きで、25年間で65万部に達したそうです。今でも「小さいころ、読んだ！懐かしい！」という学生も珍しくありません。現在の感覚からすると、表現の面で多少のギャップを感じる部分もありますが、1981年の国際障害者年から少し後の時代の空気が伝わってくる作品ですので、一度手に取ってみてください。

ここで障害の社会モデルについて少しお話します。

ここにイチゴジャムの瓶があるとします。ある障害者が、そのふたを開けることができません。なぜだと思いますか。「手に障害があるから」と考える人が多いでしょう。この答えは間違いではありませんが、ふたを開けることができないという問題の原因をその人の身体に求めるという点で、「医学モデル」的な考え方と言えます。

私には、車いすで生活している友人がいます。中学生のとき、水泳の授業でプールに飛び込み、底のセメントに頭を打って頸髄を損傷したそうです。その結果、首から下に麻痺が残りました。つまり、これまで一人でできていたトイレや入浴などの日常生活全般にわたって介助が必要になったのです。このような人の生活上の困難を、医学モデルで説明す

ることは正しいことです。事故に遭い、頸髄を損傷し、麻痺のため、自分の思うように手足を動かすことができなくなった。しかしながら、この医学モデルには問題もあります。この観点だけでは、別の問題が見えなくなるからです。

私の友人は、お風呂に入れない、働きに出かけられないといった日常生活上の問題を持っています。医学モデルの観点からこの問題を解決するには、その根本的な原因をたどり、リスクを取り除くことが優先されるでしょう。事故防止対策としてプールの監視体制を強化したり、救急医療のあり方を改善したりということが考えられます。次に、損傷した頸髄の手術や薬物治療、リハビリが施されるでしょう。とはいっても、今の医学では、元通りに回復することが困難なケースも多いため、研究開発もなされています。よりよい手術方法の開発や、iPS 細胞移植など神経再生を目指す新たな治療法、電気刺激を用いる新しい手法の開発も進められているようです。

これらは大変重要です。ですが、それだけでは、友人が今まさに直面している「お風呂に入れない」「働きに出かけられない」という目の前の生活上の困難は解決されません。

そこで出てきたのが、障害の「社会モデル」という考え方です。社会モデルでは、問題の原因を個人のインペアメント（身体の機能損傷または機能不全。友人の場合は麻痺）ではなく、介助サービスの不足などといった制度の不備や、物理的な環境や社会環境のあり方に求めます。

先ほどのジャムの例で言えば、握力の弱さではなく、容器のデザインや支援の仕組みこそが問題だと考えるのです。障害とは、社会がつくり出している障壁によって生じるもの

だ、という視点です。

社会モデルという言葉は、今や法律の中でも「社会的障壁」という言葉として用いられています。これを絵本風にたとえると、こうなります。ここは、羽の生えた人間の国です。みんな、パタパタと飛ぶことができます。でも、私やここにいるみなさんには羽がありません。社会の多数派である「飛べる人間」を基準に社会がつくられていくと、日常生活は苦勞の連続です。大学の校舎には階段は設置されないでしょう。必要ないですから。予算削減にもなります。羽のない私たちは障害者です。

私たちがこの教室に来たいと思ったとき、マジョリティたる羽のある人間に合理的配慮を求めなければなりません。ちなみに、私立の教育機関に合理的配慮が義務付けられたのは2024年で、つい最近のことです。

3 障害が描かれた絵本

次に、障害児や障害者が描かれた絵本についてお話ししたいと思います。

2000年代に入るまで、英語圏でも障害を扱った絵本はほとんど見られませんが、例外的に、ヘレン・ケラーのような歴史的偉人を描いた伝記絵本は広く流通していました。ただしそれらは、努力と克服を中心とする物語でした。

David A. Adler によるヘレン・ケラーの伝記絵本、*A Picture Book of Helen Keller* は、1990年に刊行されました。今では差別語とされるハンディキャップという言葉が使われており、時代を感じさせます。また物語全体で、光と闇のメタファーが使われています。病によってインペアメントを負ったことを「暗黒 (dark)」とし、教育や克己の心で「光 (bright, light)」を手にした、という描かれ方

です。

Jeanne Willis と Tony Ross の *Susan Laughs* (2000) という絵本では、「障害があってもみんな同じ子どもだよ」ということを優しく伝えています。スーザンはお絵がきが好き、食べるのが好き、遊ぶのが好き、などと日常生活が描かれ、最後に、スーザンが車いすに乗っている姿が描かれます。障害者も健常児と同じ子どもなんだよ、というメッセージが込められた本です。

2000年代頃までは、英語圏においても、障害の社会モデルの考え方を基盤とした絵本はほとんど見られませんでした。十分に涉猟しきれているかどうかについて自信はありませんが、きわめて少なかったと思います。

フランツ＝ヨーゼフ・ファイニクの『わたしの足は車いす』(2004) と『わたしたちの手で話します』(2006) は、障害学的な観点からも評価されている作品です。ファイニクは、薬害によって車いす生活となった当事者であり、この2冊の絵本のほかにも、児童書や一般向けの書籍を数多く出版しています。いずれもドイツ語で出版された翌年に、日本語に翻訳され刊行されました。前者は、インクルーシブ教育の文脈で重要な絵本として評価されています。後者は、手話を言語として捉える考え方が明確に示された、先駆的な絵本の一つだと言えるでしょう。日本では1995年に「ろう文化宣言」が出され注目されましたが、それからおよそ10年後に、こうした考え方が絵本という形になったことを、感慨深く思ったことを覚えています。

障害当事者が書いた絵本として、オードリー・キングの『障がいのある人たちのゆかいなおはなし』(2004) があげられます。100ページを超えるボリュームですので、一般的な絵本の枠組みから少しずれますが、当事者

の視点から、日常の出来事をユーモラスに描いた絵本です。ほかにも、James Catchpole と Karen George の *What Happened to You?* (2021) があります。かわいらしい絵柄で、異形の身体を持つ障害児に寄せられる好奇の眼差しがテーマになっています。「何があったの?」と理由を知りたがる子どもたち。しかし、主人公はいつ、どこまで語るかを自分で選び、関係のあり方を取り戻していく過程が描かれます。

Valerie Thomas と Korky Paul の絵本 *Winnie the Witch* (2006) は、障害や社会モデルを前面に出した作品ではありませんが、そのように読み替えることもできる絵本です。なにもかもが真っ黒なものばかりの家で暮らしている魔女と、真っ黒な飼い猫が登場する、とてもユーモラスな物語です。黒い猫であるがために生活上の支障が生じていましたが、環境の側を変えることで問題が解決される点は、ある種社会モデル的な観点に立った物語として指摘されています。

日本では合理的配慮の法制度化から約10年が経ち、以前に比べると、暮らしやすい社会になってきました。しかしながら一方で最近では合理的配慮がマニュアル化されて融通がきかないことがあって困った、という話を聞いたことがあります。合理的配慮 (reasonable accommodation) とは本来、当事者の声を聞き、話し合いを通じて、個々の状況や環境の要因を踏まえながら調整していくプロセスであるはずですが。そんな現在だからこそ、合理的配慮を「対話のプロセス」として体感できる絵本が必要だと考えます。

そんな時、『ねえ、きいてみて! みんな、それぞれちがうから』(2019→2021) がおすすめです。アメリカ連邦最高裁判所判事を務めたソニア・ソトマイヨールが文章を担当

し、ラファエル・ロベスがイラストを描いた絵本です。障害だけではなく、肌の色や宗教の違い、いろいろな違いを持った子どもたちが登場しています。「聞いて！」というタイトル通り、子どもたちが自分の経験や感じていることを語り、周囲がそれに耳を傾ける場面が重ねられていきます。違いは壁ではなく、世界を広げる手がかりであるというメッセージも込められています。

Eliza Hull ほかの絵本 *Come Over to My House* (2022) は、子どもが友だちの家を訪ね歩き、多様な暮らしに出会う絵本です。ろうの親がいる家、車いすユーザーの家、感覚過敏に配慮した静かな家などが登場します。どの家庭も、遊んだり、おやつを食べたりする、ごく普通の生活の場として描かれ、違いがあることが自然な日常として受け止められていきます。Kelly Fritsch と Anne McGuire、Eduardo Trejos の絵本、*We Move Together* (2024) は多様な子どもたちが一緒に暮らす日常を描いた絵本です。遊びや生活の場面を通して、違いを祝福します。

障害児や障害者が主人公の絵本は、英語圏で2000年代から増えてきますが、なかにはファイニクの『わたしの足は車いす』のように、日本語に翻訳出版されることもありました。障害者関係の絵本は、2000年代は翻訳絵本として出版されるケースが多く、日本語による日本の文脈に沿った絵本が一気に増えるのは2010年代に入ってからだった印象を受けます。こうした絵本が必要とされるようになったのは、社会や学校が変化を迫られる段階にきた時期だったのかも知れません。

サトシンさんの『わたしはあかねこ』(2011) は肌の色の違い、人との違いを肯定する内容です。西村敏雄さんの絵柄もかわいく、よく読まれているようです。くせさなえ

さんの『しゅわしゅわ村のどうぶつたち』(2013) は、「手話ではなそう」と銘打たれた絵本で、その後シリーズ化されています。くせさんの出世作は、『ゆびたこ』(2013) です。甥っ子さんらがろう学校の幼稚部に通っておられたことをきっかけに、手話を楽しむ絵本を描きたいという思いに至り、本作が出版されました。

『パンどろぼう』シリーズで知られる柴田ケイコさんのデビュー作は『めがねこ』(2016) でした。息子さんは幼いころから視力が弱く、眼鏡をかけていると、よく「かわいそう」と言われたそうです。そうした言葉への違和感から、眼鏡を前向きに、楽しめるものとして描けないかと考え、制作されたのが『めがねこ』でした。

また、「発達障害者支援法」の成立(2005)を前後して、発達障害をテーマとする絵本が相次いで出版されました。

『ありがとう、フォルカーせんせい』(1998→2001) は発達障害に関する絵本です。作者のパトリシア・ポラッコはディスレクシアの当事者で、この絵本は彼女の経験から生まれました。

これは、たじまゆきひこさんが描かれた『ふしぎなともだち』(2014) という絵本です。たじまさんは、『じごくのそうべい』(1978) という有名な絵本を描かれた方で、そちらをご存じの方も多いと思います。淡路市でインクルーシブ教育を進める学校があると知った作者が取材をして4年の歳月をかけ生まれたそうです。

『すずちゃんのうみそ：自閉症スペクトラムのすずちゃんの、ママからのおてがみ』(2018) は、自閉スペクトラム症と知的障害のある娘をもつ竹山美奈子さんが文章を手がけた絵本です。竹山さんは『あいちゃんのひ

みつ：ダウン症をもつあいちゃんの、ママからの「おてがみ』（2020）という絵本も出版されています。後者には染色体について説明するページがあり、言わば医学モデルに立った記述ですが、読者である幼い子どもが抱きがちに不安や恐れを解きほぐすためには、効果をもつ場合もある例だと思います。とてもよい絵本ですので、ぜひ手に取って読んでいただきたいと思います。

『みんなとおなじくできないよ』（2021）は、小児科医である作者・湯浅正太さんが、自分の育った家庭や知的障害のある弟を描いた絵本です。弟のことは好きだけど、学校で恥ずかしいと感じることがある。「きょうだい児」ならではの悩みや不安、孤独な気持ちが描かれています。

『発達凸凹なボクの世界』（2018）は、読み物風の絵本です。作者は精神科の看護師と医師で構成されたユニット「プルスアルハ」で、2022年にやなせたかし文化賞を受賞されました。「プルスアルハ」は、親が精神疾患を抱えている子どものための絵本も複数手掛けておられます。また、NPO法人「ぶるすあるは」として、精神障害やこころの不調などをかかえた親とその「子ども」を応援するサイトを運営されています。

私の近所に「ホホホ座」という本屋があります。店主・山下賢二さんは本屋を営むかわら、これまで多くのエッセイを出版されてきました。代表作の一つ『ガケ書房の頃』（2016）には、幼稚園から小学校までの9年間、一言もしゃべらなかつたというエピソードが納められています。それを讀んだ絵本編集者の筒井大介さんが、中田いくみさんにイラストを依頼し生まれたのが『やましたくんはしゃべらない』（2018）です。

理論から出発した絵本は、ともすると教育

臭くなります。場面緘黙症とは何か、多様性を尊重しましょう、お互い認め合ひましょう、などと私なんかもやっけてしまいます。そうすると、絵本としての美しさが半減してしまうことがあります。ですが、この本は、芸術的な観点から見ても、また当事者の側の想いを伝えるという点から見ても、完璧な絵本だと個人的に思っています。オビまでもがすばらしく、子どもの手書き風の文字で「しゃべってたまるか！」と書かれています。この絵本は全6巻からなる「こんな子きらいかな」シリーズの一冊で、ほかの作品もおすすめてです。

4 子どものための物語とインクルージョン ＜動画の視聴＞

タイラー・フェーダー『みんなみんなすてきなからだ』（2021→2021）汐文社。

Lesléa Newman and Carol Thompson *Mommy, Mama and Me*, (2009) Tricycle Press.

2冊目の絵本は、レズビアンのカップルが子育てしている日常の風景が描かれた、幼児向けの作品です。

『タンタンタンゴはパパふたり』（2005→2008）は、ニューヨークのセントラル・パーク動物園で実際にあった、オス同士のペンギンのカップルの出来事をもとに絵本化された作品です。また、マイケル・ホルの『レッド：あかくてあおいクレヨンのはなし』（2015→2017）もLGBTQ+をテーマにした絵本で、本当は青いクレヨンであるにもかかわらず、赤いラベルを貼られた「レッド」が主人公です。

これら2冊はいずれも、一定の採算が見込めると判断されて出版に至った絵本ですが、日本では絵柄の好みや内容の重さから、同様

のテーマをもつ作品が商業出版されにくい場合もあります。そうした場合、近年ではクラウドファンディングを活用して出版されることも多くなっています。サウンズブック社は、その代表的な出版社の一つです。

最近、ブリッタ・テッケントラップの『ブランコ』(2023→2025)が梨木香歩さんの訳で翻訳出版されました。150ページを超える絵本で、海辺にたたくブランコを訪れる人びとのひとときを詩情豊かな絵と言葉で紡いだ作品だと紹介されています。主題としてLGBTQ+を掲げた絵本ではありませんが、作中では、さらりとゲイのカップルの姿が描かれています。同様に近年は、障害をテーマにした作品ではなくとも、脇役の子どもが車いすユーザーとして自然に描かれることがあり、こうした絵本が増えてきた印象があります。

ここまで絵本を紹介してきましたが、これらは社会を変える力を持つグラフィック・ナラティブであり、多くの作品が世に送り出されてきました。

一方で、こうした動きに対して危機感を示す人びともいます。最近、堂本かおるさんの『絵本戦争』(2025)が刊行されました。ここでは、アメリカにおいて、先に紹介したような絵本を学校や図書館から撤去するよう求める圧力があることや、訴訟が起きている状況が紹介されています。たとえば、性自認が生物学的な性別と異なる子どもを主人公とした『ジュリアンはマーメイド』などが、その対象となっています。ただし、資本主義社会においては、これらの本もインターネットを通じて比較的容易に入手することができます。

5 禁書と絵本

カルロ・コッローディの『ピノッキオの冒険』は、みなさんもよくご存じだと思います。

この物語は、イタリアで1883年に出版された児童書で、日本でも繰り返し翻訳出版され、アニメ化などもされてきました。ところが1970年代、いわゆる「ピノキオ論争」が起こります。

この発端は、小学館が1976年に「少年少女世界文学全集」の第1巻として『ピノッキオの冒険』を刊行したことでした。ちょうど第二次ベビーブーム世代の子どもたちが小学生になった時期にあたります。販売は好調だったのですが、この『ピノッキオの冒険』について、障害者差別を助長する表現があるとして、回収を求める声が上がりました。小学館はこれを受けて謝罪し、当時刊行されていた4種類の『ピノキオ』を回収したとされています。

問題とされた『ピノッキオ』のエピソードは、次のとおりです。

- ①「びっこのまねをしている」キツネと、「めくらのまねをしている」ネコが登場する。
- ②ピノキオは、この2匹にだまされて金を奪われる。
- ③物語の終盤で、ネコは「本当のめくら」になり、キツネは半身の毛と尻尾を失った「みすばらしい」姿になる。
- ④ピノキオは、この「きたならしいこじぎ」になった2匹と再会し、
- ⑤2匹はピノキオに物乞いをする。

(カギ括弧内の表現は、出版当時の本文に用いられていた言葉をそのまま引用したもの)では、何が問題とされたのでしょうか。まず、「びっこ」と「めくら」という差別語が使われているという点に注目が集まりました。

さらに、「『障害者』は危なくて、おそろしい人達、また、不幸でかわいそうな哀れむべき人達であるという、差別するところを、小さな子どもたちにおしえこみ、植えつけてし

まいます。(略)一九世紀の抑えつけられた『障害者』の状態を、みじめなすがたのきつねやねこにあてはめて書かれたもの(「アピール―『障害者』差別の童話『ピノッキオ』の全面回収を求める」と批判されました。

これに加えて、楠敏雄さんは、『『悪いことをすれば神の罰を受けて障害者になる』といった誤った障害者観を含む』と指摘していますⁱⁱ。

小学館は批判を受けてすぐに謝罪しましたが、「少年少女世界文学全集」第1巻については差別語を「足の悪いキツネ」と「目の悪いネコ」と書き換えて回収を免れました。つまり障害者は犯罪者といった障害者観や因果応報の障害者観を問題視する批判には答えていません。

因果応報とは、良い行いは良い結果を、悪い行いは悪い結果をもたらすという考え方です。この考え方では、障害は、当人もしくは家族が前世に犯した罪が現れたものとして理解されました。そのため、障害者が家にいることは、その家の者が過去に背負った業の証しのように受け取られました。その結果、家の恥とみなされ、障害者を隠そうとする行動につながっていったのです。

当時の人々の中には、こうした動きに反対する人も大勢いました。この騒動に際し、小学館の労働組合は「一種の検閲であり、禁書に等しい処置である」と訴えましたし、児童文学の研究者もこうした規制に反論しました。

絵本『ちびくろサンボ』をご存じの方も多いと思います。しかし、現在の大学生の多くは、この作品を知りません。100人に1人ぐらいは知っているものの、「祖母の家にあったから読んだ」というケースがほとんどです。この世代間ギャップの背景には、同書が批判され「禁書」となった経緯があります。

そもそも『ちびくろサンボ』は、1899年に出版された絵本で、ヘレン・バンナーマンが、離れて暮らす娘たちのために制作したものでした。著作権意識が十分に確立していなかった時代、挿絵はステレオタイプ化された黒人像へと置き換えられ、さまざまな誤謬を含んだ形で出版され、広く流通することになります。

日本では1953年に岩波書店から出版され、人気を集めました。しかし1988年、「黒人差別をなくす会」による抗議を受け、一時絶版となります。なお、この団体は『ちびくろサンボ』に限らず、黒人をモチーフにしたカルピスやタカラトミーのロゴマークについても問題提起を行いました。両社はいずれも1990年にマークを変更しており、すでに35年が経過しています。当時は違和感を覚えた人も少なくありませんでしたが、現在の視点から見ると、問題のある表現であったと言えるでしょう。

絵本というメディアは、ポリティカル・コレクトネスの変化が早く可視化される領域の一つと考えられます。

II 創作モード

1 アイヌの絵本

ここからは、これまで手がけてきた作品についてお話しします。まず、『ちりましほのイタクラマツ(ことばのたましい)』というアイヌの絵本をご紹介します。

この絵本は、知里真志保という人物の伝記絵本です。真志保は1909年アイヌの家系に生まれました。東京帝国大学で金田一京助に師事し、アイヌ語研究の道に進みました。お姉さんの知里幸恵は、岩波文庫で今も手に入れやすい『アイヌ神謡集』でよく知られている

方です。

私は「アフルバル」というアイヌの民話に関心を持って真志保の本を読むようになったのですが、研究書を読み進めると、研究者として、人間として、すごく好きになってしまい、伝記を書きたいと思に至りました。真志保は、近代化の中でアイヌの文化も言葉も消えゆくと言われた時代にアカデミックの場で文化継承を試みた人物だったと思います。

真志保の叔母の金成マツには障害がありました。この写真の右側の方が金成マツで、左が知里幸恵です。金成マツは足に障害があって、生活の大半を室内で過ごしていたそうです。

金成マツが残した「金成マツノート」は、1万2,530ページにもわたるもので、アイヌ文学最大のインフォーマントです。大学ノートにローマ字で書き残しました。今もまだ全ての翻訳が終わらないぐらいの膨大な量にのぼります。過去の社会において、障害者が知の伝承役として地域社会にとっての宝だった一面があったのではないかと考えています。

<動画の視聴>

動画：<https://www.youtube.com/watch?v=6fKFqbw2TQA>

電子絵本：<https://www.ff-ainu.or.jp/tale/index.html>



動画QRコード

アイヌ文化がテーマの絵本ですので、1冊本が書けそうなくらい勉強しました。全てのページに論拠となる参考文献があります。研究とは違って、ビジュアル化しますから、研究論文を書くよりも見えたことも多くありました。

たとえば、この写真は、国内で研究会が行われた時のものです（絵本25頁目）。裏表紙にある真志保の全身の絵は、この写真を参考に描きました。この白黒写真を見るだけでは見過ごしていたのですが、描いてはじめて、真志保は本当におしゃれなんだなと思ったものです。

実はこの絵本は、受賞の知らせを受けた後、選考委員が「補作」してくださっています。例えば、着物の襟は、右前で統一してくださいと言われました。当初、逆にしていました。というのも、江戸時代の絵は左前が多く、明治時代などの写真では、右前と左前の人々が混在していたからです。それに対して選考委員の方から、「参考にされた絵が必ずしもアイヌを正確に描写しているとは限りません。時代によっては、アイヌを野蛮人として差別する意図で描かれたものもあるといわれています。アイヌの尊厳の回復につなげるという思いも込めて、右前に統一してください」と言われ修正しました。

真志保の初の単著、『アイヌ民譚集』（1935）の最後のページには、「古い暮らしのかけらを、少しでも私の手でかきあつめて残すことができ、しみじみ喜びを感じます」と書かれています。知里真志保が若い頃の労作です。その喜びが伝わってきましたので、この文章を絵本の最後の見開きに乗せました。これについて、もっと将来に向けて祈りを込めるような表現にしてほしいと言われました。確かに、そのほうが良いと思い、「わたしは

これからも、もっともっとイタクラマツ（言葉の魂）をのこしていきたいです」に変更しました。

真志保は、アイヌ語やアイヌ文化を研究する他の研究者に対して、辛辣な言葉を投げかけることができました。親しい友人であった山田秀三は、しばしば彼をたしなめたそうです。また、恩師の金田一京助に対して批判の矛先を向けることさえありました。当の金田一はそれを笑顔で受け止めていたようですが、内心はどうだったのかと、山田は心配しています。こうした彼の言動も、当時存在していた偏見に対する応酬であったのかもしれませんが。こうした人間味のある点も、強く印象に残る研究者である理由の一つだと思います。

2 妖怪バリアーをやっつける

以前出した絵本に、『妖怪セラピー』があります。これは、ナラティブ・アプローチについて簡単に説明し、その実践のとっかかりとなることを意図して出版したものです。

妖怪セラピーとは、ナラティブ・アプローチでいう「外在化」を、妖怪というモチーフを用いて表現したものです。「外在化」とは、問題を自分自身と切り離して客観的に捉え、新しい物語を再構築していくプロセスのことです。

ナラティブ・アプローチの先駆者であるマイケル・ホワイトの有名な事例に、「いじわるプー」があります。

遺糞症、つまり自分の排泄物で遊んでしまう6歳の男の子ニックの事例です。困り果てた両親がカウンセリングを受けに来ました。それまでニックの行動は、「遺糞症」といった医学的言説や、「言うことを聞かない、ダメなニック」「父母のしつけが悪い」といっ

た形で理解されてきました。その結果、次第に夫婦関係も悪化し、さらにニックにストレスがかかるという悪循環に陥っていました。

そこで、問題を男の子自身ではなく、「プー」という妖怪^{モンスター}を外部に設定し、家族がチームになってその妖怪をやっつける、という発想で物語を作り、会話に取り入れていきました。たとえば、「妖怪のせいで、今日もウンチを触ってしまったんだね」と声をかける。何も起こらなかった日には、「今日は、いじわるプーに悪さをされなかったんだね」といった具合です。

家族がチームとなって、この妖怪に対峙するかたちを取った結果、遺糞症は次第に見られなくなっていったという事例です。

『妖怪セラピー』は、問題をメタファー化し、妖怪として外在化し、その妖怪のせいにする実践です。10年以上前に書いた本ですが、今回、エゴサーチをしたところ、九州大学の心理系の若い研究者が、妖怪の絵を描くという妖怪セラピー的な実践の効果測定をされていたのを発見しました。実際にエビデンスが得られたそうです。

前置きが長くなりましたが、この絵本を書いたあとに、障害者運動に「外在化」という視点を取り入れたら面白いのではないかと考えるようになりました。障害者運動として、マジョリティに対して声を上げることは、とても大切なことだと思っています。一方で、それとは別のやり方として、外在化という手段も有効なのではないか、と感じたのです。

マジョリティとマイノリティが対立するのではなく、両者がチームになって妖怪をやっつける、という発想です。その場その場の困りごとに対して、何が問題なのかを整理し、具体的な解決策を検討し、実行していくこと

ができるのではないかと考えました。

そうして生まれたのが、『妖怪バリエーをやっつけろ!』という絵本です。この絵本は、障害のある兄弟が、障害者に不利益をもたらす社会的障壁、つまり「妖怪バリエー」をやっつけるお話です。

この絵本には、妖怪退散用のおふだがおまけとして付いています。小さいですが、お手元の資料にありますので参考にしてください。おふだの表には、社会的障壁の寓意としての妖怪バリエーが描かれています。裏には、「バリエーの名前」「だれにとってのバリエーなのか」「なにが問題なのか」「どうしたら解決できるのか」「まず、できることはなにか」を書き込めるようにしています。書いたり、話し合ったりすることで、問題を整理し、解決策を考えるきっかけになればと思っています。

『妖怪バリエーをやっつけろ!』の主人公の兄弟は、私の友人の平下兄弟がモデルです。お兄さんの泰幸さんは、この物語の劇化に熱心に取り組まれており、上演では主人公役を担っています。また、絵本を用いたワークショップも実践されています。自立支援センター「ばあとな」の地村貴士さんも同様のワークショップを行っておられ、月に一回程度のハイペースです。東大阪市内の小学校でのワークショップでは、学校の中にあるバリエーを探し具体的に「やっつける」方法をグループで考える授業をされているそうです。

このような形で、これからも〈絵本でソーシャルワーク〉と呼べるような実践を続けていきたいと考えています。

最後に、最新作『いっちゃんをよくこける』についてお話しして締めたいと思います。

監修は牧口一二さんです。コロナ禍で牧口さんが編集した『われら何を掴むか：障害の

プラス面を考える』(1976)を読みました。杉野昭博さんが以前「日本で初めて障害のプラス面に注目した本だ」とおっしゃっておられたことを思い出したのです。すごい本だと心を動かされました。またインクルーシブ教育がなかなか進まない現状もあります。今こそ、この本のエッセンスを絵本にしなければ、と思うようになり、勇気を出してご本人に監修をお願いしました。牧口さんが亡くなる2年前のことです。

牧口さんとは何度もやり取りをして、何度もラフを書き換えました。結構、厳しかったです(笑)。牧口さんから100%牧口さんの話なので気持ち悪いと言われたこともあります。私が牧口さんの文章を読み込んで、忠実にストーリーに反映させたからでしょう。気持ち悪いのなら、と私の色も入れていこうにしました。

50年前の本『われら何を掴むか』から一部をご紹介します。

後遺症がほとんど残らなかった左腕を軸に、地面を這いずり回って、近所の仲間たちと一日中遊んでいた。日が暮れて家に帰るころには全身泥まみれ、そんな姿をおふくろはとても喜んでくれた。ほめられたくて、わざと服を汚して帰った日を懐かしく思い出す。

牧口さんは1937年生まれですので、終戦の年は8歳でした。このころから松葉杖で歩けるようになったそうですが、それまでは学校にもお母さんに背負って連れて行ってもらったそうです。

小学生の頃、三塁のない“三角ベース”という野球が盛んだった。焼け跡の小さ

な空き地でよく遊んだ。私が打つと代走が一塁に駆け込む。そのスタートが早すぎると、守備側と攻撃側でよくもめた。

子どもたちが子ども同士で話し合いをしてルールを作っていたということです。いっちゃんは走れないからすぐにアウトになる。それじゃ面白くないから、代走を立てよう、などと、その場でルールを作る。こうしたことは最近あまり見られないのではないのでしょうか。

敗戦間もない頃で、バット代わりに棒きれを使っていたが、私の松葉杖もバットになった。そしてよく折った。(略)級友たちのハンカチが犠牲になった。何枚ものハンカチを細く裂いて長い紐にし、枯れ木をそえて杖の折れ目をつないだ。それでも頼りなく、級友に付き添われてソロリソロリと帰った。常にスペアの杖を用意していた母のことを、ふと思う。

このあたりでお話を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



<質疑応答>

○A 札幌とか登別という地名はアイヌ語なんでしょうか。

○三島 そのように言われています。諸説ありますが、北海道の地名の多くはアイヌ語だと言われています。ですから、漢字にしても読み方が独特なことが多いと思います。

○A 樺太はどうですか。

○三島 ちょっとそこまでは分からないです。大学図書館にはアイヌ語地名に関する分厚い本がたくさんありますので、ぜひ探してみてください。

○司会 私から一つ、お聞きしたいことがあります。今回お話を伺っていて、グラフィック・ナラティブのインパクトの大きさをあらためて感じました。一方で、グラフィック・ナラティブには、国や文化によって訴求力のある絵柄、あるいは伝わりやすい絵と伝わりにくい絵があるのではないかとも思っています。三島先生は、ご自身で絵本を描かれるだけでなく、みしまえつこさんとも何冊か作品を制作されていますが、そうした絵本をつくる際に、どのような点に留意されてきたのか、教えていただければと思います。

○三島 みしまえつこは私の妹で、大学を出てから武蔵野美術大学の絵本コースに行っていて、一緒に絵本を描くようになりました。『妖怪バリエー』は予算の関係で2色刷という制約があったんですが、その中で結構苦労しながら絵本をつくりました。『妖怪バリエー』の時は赤と黒と白で表現できるもので見やすい絵を目指しました。

今日、資料としてお渡ししている『いっちゃんはよくこける』の絵は、アクリル絵の具で描いたものでカラーです。カラー刷りができるようになって、やはり絵が強くなった

ような気がします。また、絵柄は日本の子どもたちになじみのある絵を目指しました。

私も部分的に絵を担当することもあるのですが、今後、私も絵を描いていきたいと欲を出しています。

○司会 今日は初めての絵本作家としてのご講演ということで、絵本について詳しくお伺いすることができてよかったなと思っています。その他、何かございませんか。

○B 今後、海外で描かれた絵本がたくさん日本語に訳されて出版されると思いますが、それだけでなく、日本社会で生きている作家がインクルーシブな内容を描き、出版され、読まれる時代がくるといいなと感じました。

○三島 本当にそういう時代がくるといいなと思います。『みんなみんなすてきなからだ』はとても良い絵本ですが、日本の小学生や中学生が、自分自身に引き付けて実感を持つには、やや距離があるようにも感じます。どこかに、どんな身体でも賞賛される「夢の国」がある、という物語として受け取られてしまう可能性もあるでしょう。日本の文脈で絵本にするとどうなるのだろうか、などと妄想しています。いろんな領域でそういった可能性のあることは感じています。

○司会 すごく面白いお話だと感じました。私は社会的包摂を専門にしている研究者ですが、ご紹介いただいた絵本の多くは知りませんでした。これほど、いまの社会的包摂やインクルージョンを考えるヒントになりそうな絵本が数多く出版されているにもかかわらず、私たち研究者はその存在をあまり把握していない。また、学生も同様ではないかと思

います。絵本の可能性は、啓発という観点から見ても非常に重要なツールだと感じましたし、私たち自身が、絵本の魅力についてもう一度学んでいく必要があるのではないかと気づかされました。

図書館には、先生にご紹介いただいた本や、先生ご自身が描かれた絵本なども所蔵されていると思います。そうした絵本を、今後の教育や学びの場で活用していくこともできるのではないかと思いますながら、お話を伺っていました。

時間になりましたので、これで終了させていただきます。ありがとうございました。

i 認知行動療法やナラティブ・アプローチ、セルフヘルプグループ、当事者研究などで、「べてるの家」がしばしば言及されます。その設立者の向谷地生良氏は、「べてるの家の歩みは、まさしくアイヌの人たちが歩んだ苦難の歴史との出会い」であったと述べておられます。しかしながら社会福祉士養成のテキストの中で日本の先住民族アイヌに言及されることは稀です。私自身、これまで方法論ばかりに目を奪われ、その実践の場の社会的背景について想像を巡らすことがありませんでした。この絵本を作ったきっかけは、そんな自戒の念もありました。

アイヌ民族文化財団の方のご協力のもと、視覚障害の方へのバリアフリーを試みました。もともと動画を作成していただける賞でテキストは音声化されますが、絵で表現した部分は音声化されません。そこで字幕の部分に絵の説明を入れると長くなりすぎますし、文字数を少なくしたら中途半端なものになってしまいます。大河内直之さんと山本宗平さんにご意見いただきつつ、今の形になりました。

ii 楠敏雄 (2006) 「再び『差別語』と『差別表現』を考える1『ピノキオの冒険』」『KSKR パンジーだより』60号、クリエイティブハウスパンジー。

三島 亜紀子 氏（絵本作家、関西学院大学非常勤講師）

■講師紹介

高校生の時にサン＝テグジュペリ『星の王子さま』を読み、児童文学作家を志す。夢の実現には学びと旅が必要だと感じて大学進学。福島県立会津大学短期大学部講師、東大阪大学教授、ケンブリッジ大学客員研究員を経て、立命館大学特別協力研究員。著書に『社会福祉学の〈科学〉性』（勁草書房）『妖怪バリエーションをやっつけろ！：きりふだは、障害の社会モデル』（絵・みしまえつこ／監修・平下耕三、令和7年度文部科学省「あなたと読みたい1冊」に選出）など。公益財団法人アイヌ民族文化財団主催「令和6年度アイヌの絵本コンクール」最優秀賞受賞。